

林忠彦 生誕100年

T a d a h i k o H a y a s h i A w a r d

社会は心を撃つ写真をさがしています

第
27
回

林
忠
彦
賞

川はゆく

藤岡亜弥



主催／周南市文化振興財団 共催／**KRY**山口放送 後援／読売新聞社 協賛／富士フイルム株式会社

<http://hayashi-award.com/>

2018

林忠彦賞は、山口県周南市出身の写真家林忠彦の功績を顕彰し、写真文化の振興を目的に、1991年(平成3)故郷である周南市と周南市文化振興財団が創設いたしました。本年は1918年3月5日に林忠彦が生まれてから100年を迎える記念の年となります。

本賞は、林忠彦が晩年アマチュア写真家の育成に力を注いだことから、当初はアマチュア写真の振興を目的としてスタートいたしました。その後、写真がデジタルへと急速に変化するなど、技術や表現形態が多様化していったことを受け、より多くの写真家に支持される賞へと少しずつ見直しを図ってまいりました。そして現在では、林忠彦が「太宰治」「坂口安吾」などの作品で戦後の写真界に颯爽と躍り出た、最もエネルギッシュな時代に照準を合わせ、社会が求める、その時代を一番象徴する写真を選び出そう、をコンセプトとしています。

「社会は心を撃つ写真をさがしています」のキャッチフレーズのもと、写真表現者すべてに門戸を広げ、林忠彦の精神を受け継ぎ、それを乗り越え未来を切り開く写真家を発掘する賞をめざしているところです。

27回目となる今回は、去る1月23日に選考委員会が行われ、95点の応募作品の中から厳正な審査の結果、藤岡亜弥さんの「川はゆく」が受賞作に決定いたしました。

藤岡さんは広島県呉市のご出身で、現在は広島を中心に精力的に活動されている気鋭の写真家です。2007年10月から2012年5月まで、文化庁の新進芸術家海外研修制度奨学生としてニューヨークに滞在され、この間2010年には日本写真協会新人賞を受賞されています。帰国後の2013年東京から広島に拠点を移し、現在も藤岡さんならではの視点で撮影を続けておられます。

受賞作の「川はゆく」は、この広島を捉えた作品です。2016年に写真展で発表され、大きな反響を呼び第41回伊奈信男賞を受賞されました。また昨年の第26回林忠彦賞でも最終候補に選出されています。2017年新たなショットを加えるなど大幅に構成を変更し、240ページにわたる写真集として発表されたのが受賞作となった写真集「川はゆく」です。

広島を象徴する「川」をタイトルにし、世界的に注目される都市である広島を、そこに住む者ならではの視線で捉えた写真の数々は、客観的でありながらも私的な眼差しで撮影され、非常に新鮮で、選考委員会でも高く評価されました。またこのたび、第43回木村伊兵衛写真賞を受賞されたところでございます。

藤岡さんには心からお祝いの言葉をお贈りさせていただきますとともに、今後のさらなるご活躍を期待いたします。

受賞作品は山口放送株式会社、読売新聞社、富士フイルム株式会社をはじめ、関係各位のご協力を得て、東京、周南市、北海道東川町と巡回展示し、オリジナルプリントは周南市が林忠彦コレクションに含めて永久に保存いたします。

林忠彦賞は、多くの方々のご協力によって発展して参りました。今後とも引き続き温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

周南市文化振興財団理事長
周南市長

木村健一郎



林忠彦
(1918～1990)

わが国の写真文化の発展において、林忠彦は木村伊兵衛、土門拳、渡辺義雄各氏などの先輩写真家とともに日本写真家協会設立に尽力する一方、1953年(昭和28)には二科会写真部を創設し、以後全国のアマチュア写真家の資質向上のため終生尽力した。こうした氏の遺志を生かしアマチュア写真の振興を目的に、1991年(平成3)林忠彦賞を設立した。

第12回からは、デジタル化の急速な進歩により多様化する表現形態に対応するため、新しい写真表現を目指す作家の参入も推し進めた。

さらに第18回より、これまでの経験をもとに、対象をプロ作家にまで広げ、時代と共に歩む写真を撮り続けた林忠彦の精神を継承し、それを乗り越え未来を切り開く写真家の発掘を目指す賞へと拡大した。

募集要項

資格：国内居住であれば、アマチュア、プロ、年齢、性別、国籍を問いません。

テーマ：自由

対象：2017年(1月1日～12月31日)に写真展、写真集、雑誌、公募等の表現媒体ですでに発表された作品。
受賞記念写真展を開催する関係上、35～70枚程度の写真で構成された作品(同一テーマによるもの)。

「写真展」での応募

- ・「写真展」で展示した作品のプリントをお送りください。(展示していない作品は対象外となります。再プリント可。)
- ・プリントの代わりに同作品の「写真集」をお送りいただくことも可能です。(その場合は展示した作品がわかるように明記。)
- ・「写真展」の会場内でポートフォリオなどを置いていた場合は、そのプリントも展示作品として含めることができます。
- ・巡回展示や会期中展示替えがあった場合は該当プリントがわかるように明記してください。
- ・資料として、写真展の「案内ハガキ」や「展示風景の写真」などを添付し、発表時期や状況がわかるようにしてください。

「雑誌」「公募」などでの応募

- ・掲載誌あるいは発表した作品のプリントをお送りください。(発表していない作品は対象外となります。再プリント可。)

【選考発表】

選考後、受賞者に通知するとともに各報道機関に発表します。
(2018年2月15日発表)
授賞式は東京で行い、東京と周南市において受賞記念写真展を開催します。
受賞作品は主催者が保存のため、銀塩ペーパー・全紙サイズで再制作し、林忠彦コレクションとして周南市美術館博物館に永久保存します。

【作品の返却】

返却方法は、受取人着払いの宅配便となります。ただし、最終候補作品については、資料として作品をご提供いただく場合があります。

【個人情報】

ご記入いただいた個人情報は、林忠彦賞に関する業務以外には使用しません。

【応募・問合せ先】

林忠彦賞事務局 〒745-0006 山口県周南市花畠町10-16
(周南市美術館博物館) TEL 0834-22-8880 FAX 0834-22-8886

- ・発表状況がわかる資料「案内ハガキ・チラシ」などを添付してください。
- ・プリントの代わりに同作品の「写真集」をお送りいただくことも可能です。(その場合は発表した作品がわかるように明記。)

「写真集」での応募

- ・そのまま「写真集」をお送りください。
- ・資料としてプリントを添付されても構いません。(その場合は写真集に掲載されているプリントのみが対象です。)

【プリント】

- ・六ツ切から四ツ切程度(インクジェットプリントも可。)
- ・できるだけファイリングした状態でご応募ください。(ファイリングできない場合は、裏面に順番を明記。)

【応募用紙】

- ・応募用紙に、住所・氏名・略歴等を明記し、制作の主旨を400字以内にまとめてお送りください。(自作も可。)

【選考委員】

大石芳野(写真家)
笠原美智子(東京都写真美術館事業企画課長)
河野和典(公社)日本写真協会出版広報委員、日本カメラ社編集顧問)
細江英公(写真家、清里フォトアートミュージアム館長)
有田順一(周南市美術館博物館館長) 敬称略・五十音順

【締切】2017年(平成29年)12月31日(日)必着

【賞】ブロンズ像(笹戸千津子作「爽」)及び賞金100万円

募集要項・歴代受賞作品など詳しくは
ホームページをご覧ください。応募用
紙のダウンロードもできます。

<http://hayashi-award.com/>



主催／公益財団法人周南市文化振興財団

写真集「川はゆく」

藤岡亜弥(ふじおか・あや)



受賞作「川はゆく」は2013年から撮り続けた広島風景である。

作者にとっての広島は、生きる場所としての今現在の広島である。四季を通じて街を歩きながら日常の広島を淡々と撮り続けた。しかし何気ない風景の中にも73年前の記憶は顔を覗かせる。広島を撮りながら「ヒロシマ」を見つめ続けることは自分自身を見つめ直すことにも似ていたという。

「川はゆく」は2016年に写真展で発表された。大きな反響を呼び、第41回伊奈信男賞を受賞した。女性として初めての受賞である。そして2017年、新たなショットを加えるなど大幅に構成を変更し240ページの大作に仕上げたのが本書である。世界的に注目される都市広島を、そこに住む者ならではの視線で捉えており、客観的でありながらも私的な眼差しで撮影された写真の数々は、臨場感を感じさせ非常に新鮮で、選考委員会でも高く評価された。

経歴

1972年 広島県呉市生まれ
1994年 日本大学芸術学部芸術学会奨励賞受賞
日本大学芸術学部写真学科卒業
1996年 個展「なみだ壺」(ガーディアンガーデン・東京)
「笑門来福」(WORKS H・横浜)
写真集『シャッター&ラブ 16人の若手女性写真家』(インファス出版)
1997年 台湾師範大学へ語学中心に留学
2001年 個展「さよならを教えて」(ニコンサロン新宿)
2004年 ビジュアルアーツフォトアワード大賞受賞
第24回写真ひととつば展入選
個展「離愁」(ニコンサロン新宿)
写真集「さよならを教えて」(ビジュアルアーツ出版)
2005年 個展「さよならを教えて」(ビジュアルアーツ
ギャラリー東京・大阪・名古屋・九州)
グループ展「離愁」ひととつば展(ガーディアン
ガーデン・東京)
マリクレールホワイトキャンペーン(スパイラル
ギャラリー・東京)

2006年 個展「私は眠らない」(ニコンサロン銀座・大阪)
グループ展「中国平遥国際写真フェスティバル」
(中国・山東省)
グループ展「フォトグラフィティ 1980-2005」
新写真派協会(ポートレートギャラリー・東京)
2007年 文化庁新進芸術家海外研修制度奨学生として
ニューヨークに滞在
2009年 個展「私は眠らない」(AKAAGA Gallery・東京)
写真集「私は眠らない」(赤々舎)
2010年 日本写真協会賞新人賞受賞
個展「Life Studies」(Dexon gallery・New York)
グループ展「飯沢耕太郎が注目する女性写真家
4人展」(リコーリングキューブ・東京)
「日本写真協会受賞作品展」(フジフォトギャラ
リー・東京)
2011年 個展「Life Studies」「アヤ子江古田気分」
(AKAAGA Gallery・東京)



2012年 帰国
個展「離愁」(AKAAGA Gallery・東京、ギャラリーG・
広島)
2014年 個展「Life Studies」(ニコンサロン銀座・大阪)
「Life Studies2」(Place M・東京)
グループ展「赤々舎 本から写真から」(スパイラ
ルギャラリー・東京)
2015年 グループ展「花～生きるということ」(東広島市
立美術館・東広島市)
2016年 個展「川はゆく」(2017年まで ニコンサロン銀座・
大阪、ギャラリーG・広島、OGU MAG・東京、BOOK
MARÛTE・高松)
第41回伊奈信男賞受賞
グループ展「Tbilisi Photo Festival 2016」
(ジョージア・トビリシ)

2017年 個展「アヤ子、形而上学的研究」(ガーディアン
ガーデン・東京)
グループ展「光―身近に潜む科学とアート―」
(東広島市立美術館・東広島市)
写真集「川はゆく」(赤々舎)

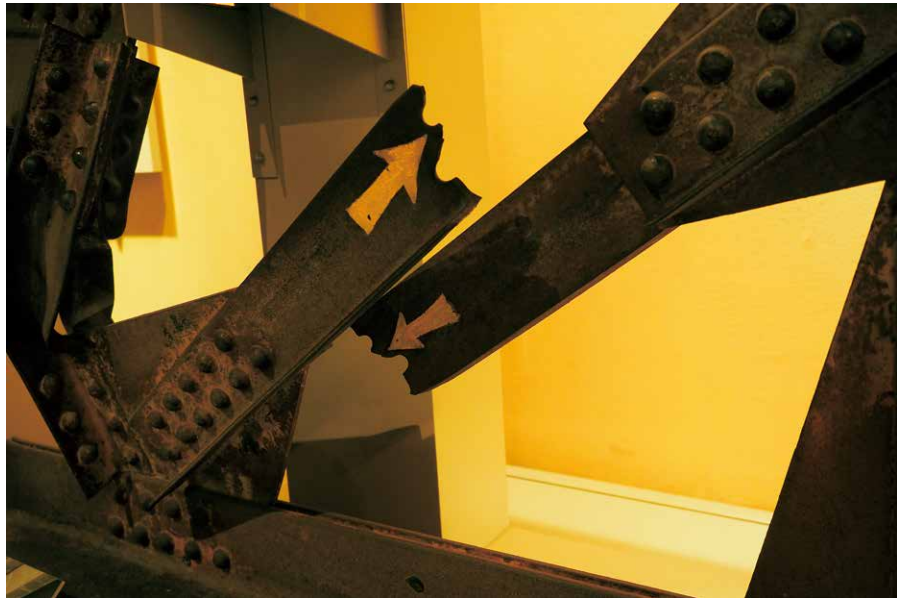
2018年 第43回木村伊兵衛写真賞受賞

コレクション サンフランシスコ近代美術館

現在、広島を拠点に活動をしている

<https://twitter.com/puchipoka>















「暖流」(写真集)

飯 島 幸 永

(いいじま・こうえい)

「Touch the forest, touched by the forest.」(写真集・写真展)

紀 成 道

(きの・せいどう)

「瀬戸内家族」(写真集・写真展)

小 池 英 文

(こいけ・ひでふみ)

「にほんのかげら」(写真集)

竹 谷 出

(たけや・いずる)

「Ango」(写真集・写真展)

野村佐紀子

(のむら・さきこ)

「border | korea」(写真集・写真展)

菱 田 雄 介

(ひしだ・ゆうすけ)

「川はゆく」(写真集)

藤 岡 亜 弥

(ふじおか・あや)

「WHISTLE／口笛」(写真集・写真展)

星 玄 人

(ほし・はると)

(敬称略・五十音順)

委員長 細 江 英 公

私は毎年選考委員として作品を拝見しています。もう11年になりますか、非常に楽しみにして選考委員会に来ます。応募作品には、風景や人物、あるいは近所の人たちが対象になっているものもあり、自由な雰囲気があり非常に新鮮です。

珍しいものを撮るというのも面白いのですが、自分がよく知っているものを撮るというのは、知っているからこそ、自分でしか撮れないものができるわけです。それを見た人たちは、初めてですから「おっ」と思う。そうすると、自分の周辺にはものすごい宝がたくさんあるんだということに気がつくと思います。好きでやっている写真というのは、嫌いなものを撮る必要は無いんです。好きなものを撮っていれば良い、それで初めて深い作品というのが生まれます。そこを考えてもらいたいと思います。

受賞作の藤岡亜弥さん『川はゆく』。この写真集は、いわゆる出版社が多くの読者に対して「今度こういうのを出版しましたからどうぞ」などといった、注目を浴びてどんどん売れるという類いのものではありません。自分のための出版物、それを他の人も喜んで見てくれると考えた方が良いでしょう。この風景をぜひ残しておいて欲しい、などといったリクエストがあったのではなく、冒頭にも申し上げましたが、自分が好きだから、自分だけのために一生懸命に撮る写真というのが一番魅力があります。自分の好きなように撮れば良いので、自分にとって面白いかどうかということが一番なのです。

私も広島へ何回か通いました。広島に関する本も出していますから、この写真集を見ますと胸が引き締められる気がします。ここに写っている原爆ドームなどはライトアップされ、イルミネーションも美しいのですが、ある意味問題意識が感じられなくなっているような気がします。多くの人が見に来てくれば広島のためにはなるのですが、あまりにも観光化されすぎると…という思いも写真集を見ながら感じました。

星玄人さんの『WHISTLE／口笛』は東京の街を撮った写真です。街中で知らない人を撮るというのはとても難しいものです。撮られたくない人が沢山いるわけで、知らない人にカメラを向けられたらあまり良い感じはしませんから。そういう所をカメラを持って撮って歩くのは危険な行為であることも事実です。ですから相当プロにならないと撮れません。この作品は、写真を撮る技を身につけて、そういう人が沢山いるんだということも一方で考えながら撮られた街のスナップショットだと思います。

林忠彦賞は山口県の周南市という地方都市で実施されています。予算にしろ時間にしろこうした大きな事業をされるのは大変なことだと思います。しかしこれまで続けてこられたのは大変価値のあることです。写真家の皆さんは、ぜひ意欲を持って優れた作品を応募してください。

今回の応募作品の中で少し気になったのは、ドキュメンタリー写真が少なかったことです。逆にアートというのでしょうか、心象というのでしょうか、事実を伝えるというよりは自分の想いが強く出ている写真集が、例年に比べて多かったように思いました。けれど心象であろうとドキュメンタリーであろうと、どの作品も皆さん一生懸命に撮影し、写真集として、あるいは展覧会としてまとめている、それらを拝見していてとても嬉しく頼もしく思いました。各人の一生懸命さと、情熱がぐんぐんと伝わってきました。

林忠彦賞に選ばれた藤岡亜弥さんの写真集『川はゆく』。藤岡さんは広島に住んでいることもあって、やはり広島のことをよく知っています。四季に応じて自分で歩きながら広島を感じ、その感じたものを写真に撮る、といった様子がこの一冊の中に詰まっています。写真集を見ながら、藤岡さん本人がページの何処かに、あるいはそこら辺のどこかにいるような臨場感のようなものも感じます。8月6日の式典の写真もありますが、その他にも一年間を通して、例えば雪の原爆ドームや平和公園などの写真もあり、遠くに住む人にはなかなか撮れない広島がここには写っています。市民の生活感をにじませながら真夏の太陽がガンガンと照り付けるあの8月6日の広島をも浮かび上がらせています。今年で原爆投下から73年になりますが、過ぎていった広島が今どうなっているかなども、よく出ていると思いました。ただ、肩の力を抜いてもう少し素直に撮ってもよかったかなとも感じましたが、力作だと思います。

竹谷出さんの『にほんのかけら』も力作です。2009年から2016年までの7年間、日本全国を回って撮影しています。モノクロームならではの表現力を持って日本というものを編み出した一冊です。巻末の撮影地の地図も大きくものを言っています。

紀成道さんの『Touch the forest, touched by the forest.』。この作品はなかなか思慮深いテーマです。精神的な病を受けた人と自然とのかかわり、あるいは自然に包まれるようにして病が回復していくといった感じがあります。紀さんも述べていますが、結局、病を治すのは自然ではなく人間なんだということを、紀さんが思いながらこの作品を編み上げたというのが意義深いと思いました。写真は白黒です。モノクロームの自然、なかでも落ち葉に色を感じられるような……そうした表現は並ではできないでしょうね。写真集のカバーは、モノクロームの写真ですがその上にきれいに紅葉した落ち葉が貼ってあり、魅せられます。私はとても好きな写真集です。撮影されている人たちも含めてこの作品から教えられることがたくさんあります。じっくりとしっかりと深く撮ってきたのではないのでしょうか。

『暖流』という飯島幸永さんの作品は、「八重山諸島につなぐ命」として40年の歳月を経て写真を撮っています。八重山の人たちのゆったりとした暮らしぶりや風土、生活や文化、そうしたものが上手に織りなされていて、人びと、とりわけおばあちゃんたちの表情が魅力的で、飯島さんはここで歓迎されながら撮影したのだらうと感じました。

今回は、例えば北島敬三さん、鬼海弘雄さん、百々新さん、石川直樹さんなど、もう既に十分実績があり評価も高い方のお名前が候補に挙がっていたのですが、そういった方たちはあえて選には入れませんでした。もう少し中堅で、これからの活躍も期待でき、なおかつ作品の完成度の高い作家さんを選んだと思います。

全体を通してみると、日常生活を撮った作品、それから海外に行ってドキュメントするという二つの傾向があったように思います。両方とも大事なテーマであるとは思いますが、多くのそういった傾向の作品の中から藤岡亜弥さんが選ばれたのには、やはり違いがあったからだと思います。

藤岡さんの作品『川はゆく』は、広島の日常を淡々と撮っているように見えながら、自分の故郷である広島というものを非常に客観視し、その社会的な意味、歴史的な意味を捉えながら、現在の広島、藤岡亜弥の広島を作り上げているのではないかと思います。この客観的な眼差しと、それから私的な眼差しというのは、とても意味深いものがあると思います。

野村佐紀子さんの『Ango』。野村佐紀子さんも十分実績のある方ですが、今回あえて最終候補に残したのは、「Ango Sakiko」というブックデザインだけでなく、坂口安吾と野村佐紀子がタッグを組む、もう亡くなった坂口安吾と現在の野村佐紀子が四つに組んで、堂々と、戦争であるとか女性であるとかということを考え、写真だけではなく読み物だけではなく、写真と文章のコラボレーションをした、非常に文学的な実験的な作品だったからです。ブックデザインも本当に素晴らしいです。

それから紀成道さんの『Touch the forest, touched by the forest.』。まだ39歳と若い作家さんですけど、非常に感動的な作品です。精神病院の環境をテーマにして撮っています。重いテーマになりがちですが、その環境を森というキーワードで非常にすがすがしく撮られていて、見ていて気持ちのいいものでした。

今回の林忠彦賞は、最終候補に上がらなかった人も含めて、とても質が高かったように思います。

今回の林忠彦賞の応募作品は、ドキュメンタリーに優れた作品が基本となっていたように思います。ドキュメンタリーとは、ある意味、偽りのない、見たままの本人の表現だと思うのですが、今回は特に、その秀作が写真集に集約されていたと思います。これまでだと写真展の作品もかなりあったのですが、今回は多くの皆さんが写真集に編まれていて、しかもそれが、非常によくまとめられていたということです。

中でも、林忠彦賞に輝いた藤岡亜弥さんの写真集『川はゆく』——これは2016年に伊奈信男賞を受賞した写真展が基本になっていますけれど、写真集を編集するにあたって、作品の並びとか新しいショットを入れるなど、写真展のときとは構成がガラリと変わっていました。それがとても新鮮でした。彼女は2007年から文化庁新進芸術家海外研修制度奨学生としてニューヨークに滞り、2012年に帰国して東京に戻ってきたのですが、東京には戸惑いを覚えたということで、出身地の呉市に近い広島市、いわば故郷に帰られて、この広島という——タイトルは「川はゆく」になっているのですが——いわゆる、日本の中でもエポックメイキングというか、みんなが注目する都市、その現在の広島を非常に巧みにドキュメントしています。今まで数多くの写真家が広島というテーマで、その多くは原爆を中心に据えて撮影していますけれど、彼女の広島というのは、——もちろん原爆を避けてはあり得ないのですが——平和のシンボルです。生きる場所としての現在の広島を、とてもおおらかに謳いながら表しています。そこが今までに撮られた「広島」あるいは「ヒロシマ」の写真と大きく変わっていて新鮮なのです。今を同じ環境で生きている人の表現だな、と思いました。

そして私の次点は、竹谷出さんの写真集『にほんのかげら』。この方の非常に分厚いモノクロームの写真集は、日本の各地に見られる光景の中から、だれもが感じている印象的な光景を巧みに拾い上げています。「にほんのかげら」というタイトルもいいですね。いわば、これは日本列島のエッセンスというか、海・山・森・川・田園・町、そしてそこに生きる人たちの、それぞれが息づいている日本列島（北は北海道礼文島から南は沖縄県波照間まで）がありました。ご本人によれば、「電車、車、徒歩」でまわられたそうですが、その距離からしても、ものすごい労作です。

さらに、紀成道さんの写真集『Touch the forest, touched by the forest.』は、北海道の病院で生活をする、精神を病んだ人たちのドキュメンタリーですが、どのショットを見ても切れ味が鋭く、人もモノも自然も生き生きとして輝くばかりであります。題材としても普段、我々が目にするものがない、病院と患者と見守る人と、そして、それを取り巻く自然、これらが一体となって生きている力というものをじつに見事に表現しています。

最後になりましたが、今回とても気に入っている作品に、写真集『瀬戸内家族』があります。これは瀬戸内海で暮らす家族の、いわゆるファミリー・フォトです。作者の小池英文さんは中堅クラス、中年よりちょっと若い写真家ですが、このひと独特のカラー表現で瀬戸内の島に暮らす人びとの生活が、ここでも生き生きと、そしてのどかに温かく表現されています。とてもすがすがしい作品です。

「旬」の写真を選ぶ林忠彦賞。なだらかに、なにか写真の様相が変わりつつある、あるいは変わったように感じた選考委員会でした。

今回の傾向は、すでに大家の域に入った方々が、改めてそのスタイルを問い直したものの、遠くに通いながらも目指すテーマに果敢に挑むもの、また、忘れることのできない東日本大震災のその後を丹念に検証するものなど、それぞれにテーマを掘りさげる試みが感じられ見ごたえがありました。また、このところ目立つのが、写真集そのものが作品というか、その考え方が一段と増してきたように思います。コンセプトがはっきりしており、それに写真が綿密にレイアウトされ、加えてデザイン、装丁など、隅々にまで気が配られているというか……。

さて、そのようななか大賞に輝いたのが、藤岡亜弥さんの『川はゆく』でした。前回は、写真展で最終候補作品となりましたが、今回はそれをベースに、その後、撮影された写真も盛り込み、写真集としてのチャレンジでした。

この作品は、2013年から広島市で暮らしながら、写真を撮ることで、その広島を改めて見つめ直したものです。そして、撮りながら行きついたところは、ここは幾筋かの川の街であり、そして73年前の出来事、原爆投下の陰惨な記憶が今もそこそこに漂っているという事実です。一見、広島カープの応援やフラワーフェスティバルと現在の平和都市のスナップに見えます。しかし、良く見ると原爆ドームや資料館のジオラマ、テレビに映ったオバマ、トランプ大統領のニュースなど、この街だからこそ感じるデリケートな光景も含まれ、改めて途轍もなく大きなテーマだということが分かりました。これまで多くの先輩方が作品化された難しいテーマですが、藤岡さんの広島は、入りやすく分かりやすい、しかしなにかを感じ考えさせてくれる全く新しいタイプの広島像ができあがっていました。

今年は平昌オリンピックの開催年、菱田雄介さんの『border | korea』が気になりました。38度線を境に民族が分断、自由主義と社会主義という二つの国家が生まれました。その38度線を対称軸に両国の人々を通して、変わったもの、変わらなかったものを写真の力で見つめたものです。これも難しいテーマですが、今の現実が写しだされ、菱田さんの人間性が滲んでいるのか不思議と希望のようなものが湧いてきました。

もうひとつ、ストリートフォトで印象に残るものがありました。星玄人さんの『WHISTLE／口笛』。2005年から2014年にかけて、都市開発が進むなか、新宿と横浜そして地方都市の繁華街をテーマに、自分なりの主張を強くもちながら暮らしている人々にカメラを向けています。見ていると躍動する人間力やバイタリティーさえも感じる不思議な世界観が捉えられていました。

最後に林忠彦賞の特色のひとつ女性の写真家、表現者。テーマをさらに深く追求める方、次のテーマに入られた方、初めて出品された方など、その勢いは止まることがありません。良い意味で写真の形が変わっていく、いや大きく広がっていく、その原動力となっているように思いました。

林忠彦賞のキャッチフレーズは、「社会は心を撃つ写真をさがしています」。あえて心を打つを、

“撃つ”にしています。次回も“心を撃つ”写真をまっています。それは、きっと全世界をも“撃つ”と思います。

これらの講評は、選考直後のインタビューに、後日各選考委員により加筆、修正を加えたものです。



選考委員

日本写真協会賞

公益社団法人日本写真協会は、写真を通じて国際親善の推進と文化の発展に寄与することを目的として、1952年（昭和27）に設立された日本で最も権威のある写真団体です。

「日本写真協会賞」は、日本写真協会が、日本の写真界や写真文化に顕著な貢献をした個人や団体に対して贈る賞で、国際賞、功労賞、文化振興賞、年度賞、作家賞、学芸賞、新人賞の各賞があります。

林忠彦賞は、地域における写真文化の振興に顕著な貢献をしたとして、1996年（平成8）「文化振興賞」を受賞しました。



文化振興賞で授与されたブロンズ像
松永 真「メタルフリース」

大石 芳野（おおいし・よしの）

東京都生まれ。日本写真家協会、日本民族学会、日本ペンクラブ会員。日本大学客員教授。日本大学芸術学部写真学科卒業後フリーの写真家となる。戦争や内乱後の人々の姿に視点を向けたドキュメンタリー作品を手がけ、アジア、アフリカ、ヨーロッパなどで取材を行う。

受賞—1982年(昭和57)日本写真協会年度賞。1990年(平成2)講談社出版文化賞、アジア・アフリカ賞、1994年(平成6)芸術選奨文部大臣新人賞。2001年(平成13)『ベトナム凜と』で第20回土門拳賞。2007年(平成19)紫綬褒章。2014年(平成26)『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』でJCJ賞(日本ジャーナリスト会議)他。写真集—2005年(平成17)『子ども 戦世のなかで』(藤原書店)。2011年(平成23)『それでも笑みを』(清流出版)。2013年(平成25)『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』(藤原書店)。2015年(平成27)『戦争は終わっても終わらない』(藤原書店)。2016年(平成28)永六輔との対談『レンズとマイク』(藤原書店)、『沖縄 若夏の記憶』(岩波現代文庫)他。

笠原 美智子（かさはら・みちこ）

1957年(昭和32)長野県生まれ。明治学院大学社会学部卒業。シカゴ・コロンビア大学大学院修了。1989年(平成元)から東京都写真美術館学芸員。現在、同館事業企画課長。著書に『写真、時代に抗するもの』『ヌードのポリティクス』など。主な展覧会企画に、1996年(平成8)「ジェンダー、記憶の淵から」展、1998年(平成10)「ラヴズ・ボディーヌード写真の近現代」展、2001年(平成13)「手探りのキッス、日本の現代写真」展、2008年(平成20)「オン・ユア・ボディ 日本の新進作家」展、2010年(平成22)「ラヴズ・ボディー生と性を巡る表現」展、2012年(平成24)「日本の新進作家vol.11 この世界とわたしのどこか」展、2017年(平成29)「ダヤニータ・シン インドの大きな家の美術館」展等。2005年第51回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナーとして「石内都 マザーズ2000-2005」展を企画。2018年4月1日より公益財団法人石橋財団プリチストン美術館副館長。

河野 和典（こうの・かずのり）

1947年(昭和22)鳥取県生まれ。1969年(昭和44)(株)日本カメラ社入社。1971年(昭和46)より月刊『日本カメラ』編集部。この間、『名機を訪ねて』(那和秀峻著)、『レンズ汎神論』(飯田鉄著)、『目からウロコ』(杉浦康平、若桑みどり、筑紫哲也、上野千鶴子、森村泰昌、池澤夏樹、石川好、竹村和子、中沢新一、小森陽一共著)などの単行本や別冊『ボラロイドの世界』を手がける。1999年(平成11)から2004年(平成16)まで月刊『日本カメラ』編集長。2008年(平成20)独立、スタジオレイを設立。2013年(平成25)から公益社団法人日本写真協会の出版広報委員、理事に就任し、『日本写真協会会報』『日本写真年鑑』編集に携わる。

細江 英公（ほそえ・えいこう）

1933年(昭和8)山形県生まれ。1954年(昭和29)東京写真短期大学(現・東京工芸大学)写真技術科卒業。1956年(昭和31)の第1回個展「東京のアメリカ娘」以来、海外、国内で写真展を多数開催。作品集に『おとこと女』『薔薇刑』『鎌鼬』『ルナロッサ』など多数。1970年(昭和45)芸術選奨文部大臣賞、1998年(平成10)紫綬褒章、2003年(平成15)英国王立写真協会創立150年記念特別賞、2007年(平成19)旭日小綬章、2008年(平成20)毎日芸術賞受賞。2010年(平成22)文化功労者。2017年(平成29)旭日重光章受賞。東京工芸大学名誉教授、1995年(平成7)より清里フォトアートミュージアム館長。

有田 順一（ありた・じゅんいち）

1955年(昭和30)山口県周南市生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。1983年(昭和58)周南市文化振興財団勤務。1991年(平成3)林忠彦賞創設から事務局兼務。2010年(平成22)周南市美術館館長。林忠彦、秋山庄太郎、緑川洋一、細江英公、立木義浩、星野道夫、岩合光昭等の展覧会を担当。その他、周南市出身の洋画家 宮崎進、詩人 まど・みちおの顕彰活動を推進する。

（敬称略・五十音順）

歴代選考委員

秋山 庄太郎（あきやま・しょうたろう）写真家

植田 正治（うえた・しょうじ）写真家

大竹 省二（おおたけ・しょうじ）写真家

岡井 耀毅（おかいてるお）写真ジャーナリスト

齋藤 康一（さいとう・こういち）写真家

立木 義浩（たつき・よしひろ）写真家

田沼 武能（たぬま・たけよし）写真家

中村 正也（なかむら・まさや）写真家

奈良原 一高（ならはら・いっこう）写真家

緑川 洋一（みどりかわ・よういち）写真家

森川 紘一郎（もりかわ・こういちろう）元周南市美術館館長

渡部 雄吉（わたべ・ゆうきち）写真家（敬称略・五十音順）



「カシュガル(喀什)」

第1回

「西域—シルクロード」(写真集) 後藤正治(ごとう・まさはる)

1946年(昭和21)東京都生まれ。祖父、父の影響で小学校から写真を始め、植田正治に師事した後、シルクロードをテーマに撮影を開始。1990年(平成2)九州産業大学大学院芸術研究科(写真専攻)に入学、1992年(平成4)修了。2001年(平成13)第25回全国高等学校総合文化祭写真部門審査委員長。写真展開催、写真集出版多数。静岡県函南町在住。

作品は非常に格調も高く、作家の写真に対する真摯な情熱と、その作品集の持つ説得力に、選考委員長として敬意を表したい。いすれにしても、絶賛に値する作品が第1回目の林忠彦賞に選ばれたということは誠に慶賀すべき出来事だと思います。

http://www.dialand.co.jp/public_html/

<http://blog.goo.ne.jp/gotoh1031>



「山羊と少年
〈折々の詩〉」

第2回

「田園の微笑」(写真集) 捧 武(ささげ・たけし)

1933年(昭和8)新潟県生まれ。1955年(昭和30)頃から田園の風俗を撮り始める。1958年(昭和33)新潟県アマチュア写真連盟発足、以後30年にわたり事務局担当。1964年(昭和39)新潟県展にて審査員の林忠彦から奨励賞受賞。以後、県展や新潟二科展で入選入賞を重ねるなど活躍した。2007年(平成19)新潟県写真芸術協会発足、初代会長に就任。2010年(平成22)死去。

30年もの歳月をかけ写真集を作り上げた捧さんの作品が選考委員の皆さんの支持を得たということは、生前、特に晩年に林さんがおっしゃっていた「写真は記録であることを痛感した」という言葉に照らし合わせても、非常に妥当であったと思います。



「黒田家(小笠町) 堀をめぐらせた代官屋敷」

第3回

「静岡の民家」(写真集) 木村仲久(きむら・なかひさ)

1938年(昭和13)静岡県生まれ。日本大学工学部土木工学科卒業後、静岡県庁勤務。全日本写真連盟、二科会で活躍した。地元を中心に写真集団影法師を主宰するなど、静岡県写真界の指導的立場を務めた。故郷をテーマに写真展開催、写真集出版多数。1999年(平成11)死去。

静岡県内に点在する重要な旧家の重厚なたたずまいを、風土に生き続けてきた暮らしとの関わり合いで見つめたもので、格調高いカメラアイは決して単なる建築写真的なアプローチではありません。懐郷の思念も端正な構成の中に見事に抑制されて、写真家の肉声が、失われていく「家」の中を通り過ぎていきます。



「村の子供達」

第3回

「たかちほ」(写真集) 田崎 力(たさき・つとむ)

1920年(大正9)宮崎県生まれ。1941年(昭和16)九州医学専門学校(現久留米大学医学部)卒業。1951年(昭和26)頃からカメラ雑誌に応募し、土門拳に指導を受ける。二科会を中心に各コンテストで活躍。1996年(平成8)宮崎県文化賞(芸術部門)受賞。医学博士。2012年(平成24)死去。

長年にわたる氏の労作の総集編ともいべきもので、神楽の里の高千穂へ注がれる眼の優しさが格別です。さりげない描写の中にも伝承の風土の哀歓が深々と生きています。記録の美しさを改めて感じさせました。



「元陸軍一等兵 重河博之
ウマル・サントス・シゲカワ」

第4回

「帰らなかった日本兵」(著書) 長 洋弘(ちよう・ようひろ)

1947年(昭和22)埼玉県生まれ。日本体育大学、武蔵野美術大学卒業。東京写真専門学校中退。1979年(昭和54)国際児童年記念写真展大賞受賞。1982年(昭和57)から85年(昭和60)までインドネシア・ジャカルタ日本人学校に勤務、ライフワークとなるインドネシア残留元日本兵の取材を開始する。1994年(平成6)『帰らなかった日本兵』、2007年(平成19)総集編となる『インドネシア残留元日本兵を訪ねて』刊行。他にも著書、写真展多数。埼玉県比企郡吉見町在住。

写真の力を十二分に発揮した作品といえるでしょう。一冊の本を書く作者の真摯な取材姿勢が強く伝わってきます。日本の戦後を考える上でも非常に貴重な写真的記録として評価でき、素材の力強さとしても文句のつけようがない作品でした。



「天城山 1994.10.8」

第5回

「追いつめられたブナ原生林の輝き」(写真集) 岡田 満(おかだ・みつる)

1946年(昭和21)大阪府生まれ。大阪市立大学2部法学部卒業後、大阪府立生野高等学校に赴任、聴覚障害生徒の職業教育に携わる。大学3年の時に写真を始め、1990年(平成2)からブナに魅せられ各地の原生林を追い続ける。1995年(平成7)それらをまとめた「追いつめられたブナ原生林の輝き」刊行。その後も取材を続け現在に至る。写真展開催、写真集出版多数。大阪府大阪市在住。

とにかく、すべてにわたってしっかりしています。装丁もすばらしいし、撮影している題材も良いものです。ブナは被写体としても地味ですから、あまり扱われてきませんでしたが、なかなかこれだけうまくとめられないと思います。

<http://okaman.jugem.jp/>



「チーターの子ども」

第 6 回
「サバンナが輝く瞬間」(写真集) 井上冬彦 (いのうえ・ふゆひこ)

1954年(昭和29)東京都生まれ。東京慈恵会医科大学卒業。1987年(昭和62)初めて東アフリカを訪れサバンナの自然と動物をテーマに写真活動を始める。1996年(平成8)写真集「サバンナが輝く瞬間」刊行。現在はクリニックを開業し、医師、写真家としての眼で「生命とは何か」という問いに向き合っている。医学博士。日本写真協会会員、サバンナクラブ顧問。神奈川県横浜市在住。

サバンナの大自然の中で逞しく生き抜く野生動物たちの姿を、慈愛に満ちた温かい視線で捉え優れた写真映像に結実させており、長年にわたる作者のその努力と取材姿勢を高く評価したいと思います。

 <http://www.fuyuhiko.jp/>



「父さんの仕事場は
最高の遊び場所」

第 7 回
「ぼくは、父さんのようになりたい」(写真展) 井上 暖 (いのうえ・だん)

1943年(昭和18)東京都生まれ。日本大学文理学部心理学科卒業。映画のスクリーン写真に魅せられて小学校の頃から写真を始める。1967年(昭和42)料理店経営を始める。1997年(平成9)写真展「ぼくは、父さんのようになりたい」開催。日本大学心理学科方寸会会員。東京都八王子市在住。

この作品は、自然光を生かした大判カメラによるガッシリした撮影で、その場の雰囲気と生活感を十分に取り入れ深みのある写真に仕上げています。貧しいながらも家族の仕事に誇りを持って働く子どもたちの姿を、写真の基本ともいえる方法で取材した姿勢になにより好感が持てます。



「丙中洛(ピンツンロオ)」

第 8 回
「天空の民」(写真集) 清水公代 (しみず・きみよ)

長野県生まれ。長野県立松本蟻ヶ崎高校卒業。46歳の時写真を始める。写真家小久保善吉に師事。写真活動を通して中国大陸に魅せられ、撮影テーマを主として中国少数民族の生活と文化に定める。1993年(平成5)まで取材活動が続け、1998年(平成10)写真集「天空の民」刊行。現在もアジアにおける少数民族の生活文化をテーマに取り組んでいる。日本写真家協会会員、日本写真協会会員、全日本写真連盟関東本部委員。東京都青梅市在住。

今回の受賞作については、アマチュアでありながらよくこれだけの作品ができたものだと感じました。これからも、作品作りに励んでいただきたい。



「鳥取県北条町下北条 1993年」

第 9 回
「Personal View〔視線の範囲〕」(写真集) 渡里彰造 (わたり・しょうぞう)

1935年(昭和10)鳥取県生まれ。鳥取県立米子南高校卒業。長男誕生を機に成長を記録するため写真を始める。植田正治に師事。山陰写真作家集団に参加、ニッコールコンテスト、二科会写真部展で入選入賞多数。日本写真協会会員、二科会写真部会員、二科会写真部鳥取県支部支部長、鳥取県写真連盟会長、鳥取県美術展運営委員。2012年(平成24)死去。

山陰地方の日常的な光景の中から、独特の鋭い感覚とユーモラスな視点で切り取られたモノクロスナップです。自分の視点をきちんと定めてコツコツと撮り続けていけば、身の回りのものでも立派な写真になり、大きな成果に結びつくという良いお手本になったのではないのでしょうか。



「大鹿歌舞伎」

第 10 回
「塩の道 秋葉街道」(写真集・写真展) 竹林喜由 (たけばやし・きよし)

1943年(昭和18)愛知県生まれ。静岡県立商業高校卒業。1972年(昭和47)から本格的に写真を始め、翌年写真集団影法師に入会(現在退会)。月例コンテストなどで多数入賞し頭角を現す。各所の写真講座講師を務め後進の指導にあたる。日本写真協会会員、全日本写真連盟関東本部委員、静岡ライカ倶楽部会長、静岡白黒写真同好会会長。静岡県藤枝市在住。

塩の道という歴史的な街道を丹念に取材した力作で、一つの大きなテーマに作者が精魂込めて取り組んだという情熱がストレートに伝わってくる作品です。晩年に『東海道』を上梓した林忠彦さんの業績を記念する賞に、内容的にも誠にふさわしい受賞作といって良いでしょう。

 <https://www.facebook.com/kiyoshi.takebayashi.3>



「N列車 1999」

第 11 回
「ニューヨーク地下鉄ストーリー」(写真展) 角田和夫 (すみだ・かずお)

1952年(昭和27)高知県生まれ。高知県立高知工業高校卒業。大阪写真専門学校卒業。1988年(昭和63)「満月の夜」開催以降、写真展多数開催。1996年からは父の残した手記をもとにシベリア抑留の取材を始める。1999年(平成11)文化庁派遣芸術家在外研修でニューヨークのICP(国際写真センター)で研修を受ける。2006年(平成18)宮崎進&角田和夫2人展「シベリアから平和を考える」開催(高知県香美市立美術館)。日本写真作家協会会員、高知県南国市在住。

今回の作品はニューヨークの地下鉄を取材したもので、実に丹念に撮影しているなと感じました。地下鉄に行き交う人々の人間模様を、鋭いカメラアイでしっかりと切り取っています。一つのテーマに打ち込んで、見る者を退屈させないほどのバラエティーの豊かさも持っています。

 <http://www.kazuosumida.com/>



第 12 回
「静かな時への誘惑」(写真展) 石川 博 雄 (いしかわ・ひろお)

1951年(昭和26)愛知県生まれ。1996年(平成8)『アサヒカメラ』4月号に「風の気持ち」発表。1999年(平成11)写真展「木花物語・あなたと暮らした街」開催。以後2001年(平成13)「木花物語・風と出会った時」、2002年(平成14)「静かな時への誘惑」、2004年(平成16)「月マツモノタチヨ・越中オウラ節」2009年「手のなかの詩」等、写真展多数開催、写真雑誌にも掲載される。愛知県一宮市在住。

この作品はなかなか味わいのあるモノクロ写真です。写真にはドラマ性がなければいけないというのが僕の持論ですが、石川さんの作品はただ単にきれいに撮っているだけでなく、その中に日常のドラマを感じさせます。モノクロの神髄をよく捉え、個性的で独特な写真世界を作り上げていることも見事です。

<http://blog.goo.ne.jp/gookoborettemoyukumono>



「青夏 1999年8月」

第 13 回
「海を見ていた一房総の海岸物語一」(写真集・写真展) 飯 田 樹 (いいだ・たつき)

1941年(昭和16)千葉県生まれ。千葉大学教育学部卒業。1984年(昭和59)竹内敏信に師事。翌年から故郷房総の海と人をテーマに撮影を続ける。1994年(平成6)千葉県民写真展グランプリ。1998年(平成10)日本写真家協会展優秀賞。写真展多数開催。2010年(平成22)第60回記念流形展竹内敏信賞受賞。日本写真協会会員、日本写真作家協会会員、流形美術会写真部委員、千葉県写真美術会顧問、千葉県写真連盟相談役ほか。千葉県東金市在住。

この作品は、千葉の房総の海をずっと撮り続けたものを一冊にまとめた作品集で、カメラワークがよく、海と人びととの関わりや、自然の表情を詩情豊かに写し出しています。その健康的な作風は現代の房総海岸に見るさまざまなドラマを表現しており、全編をとおして快い緊張感が伝わってきます。色彩的にも優れた作品です。



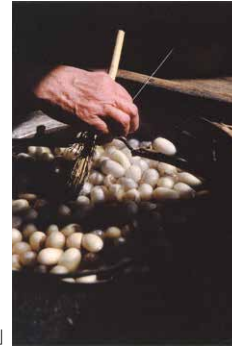
「古志の朝 8月 山古志村」

第 14 回
「古志の里II」(写真集・写真展) 中 條 均 紀 (なかじょう・まさのり)

1952年(昭和27)新潟県生まれ。東京農業大学卒業。1986年(昭和61)写真活動を開始。1987年(昭和62)から山古志村とその周辺の風景や風俗を取材し、1999年(平成11)写真集「古志の里」、2004年(平成16)『古志の里II』刊行。同年10月23日の新潟県中越地震で壊滅的被害を受けた山古志村の震災前の姿を記録する貴重な記録となった。同年新潟県長岡市にアトリエ“Shinla—シンラー”建設。写真教室、コンテスト審査員、講演等の活動を行う。日本写真協会会員。新潟県長岡市在住。

これは、作者が山古志にずっと通い続けて撮ってきた作品で、ふるさとの素晴らしい風景を見続け、なおかつそれを撮り続けて心に残る風景写真を作りあげたこと、中越の大地震の被害により昔のような棚田が二度と見られないのではないか、そういう意味で山古志の文化財、自然の美しさが写真として残された大切な作品であると考え、いろいろな意味を込めて決定させていただきました。

<http://ameblo.jp/ateliershinla/>



「上州座繰り
2002年3月
群馬県勢多郡富士見村」

第 15 回
「蘭の輝き」(写真展・雑誌掲載) 田中 弘 子 (たなか・ひろこ)

1942年(昭和17)東京都生まれ。1992年(平成4)から4年間関東デニス協会ジュニアニュース誌広報写真担当以後写真活動を続け、日本写真家協会展などで入賞を重ねる。1998年(平成10)から群馬県の養蚕業の取材を始める。2005年(平成17)「蘭の輝き」としてまとめ写真展と雑誌に発表した後も活動を継続、富岡製糸場世界遺産登録推進運動やシルク関係の著作に作品が使用される。日本写真協会会員、日本カメラ財団JCIIフォトサロン会員。東京都小金井市在住。

この作品は、特別な技法を使って見せるのではなく、蘭を生産する人々と蘭との関係を克明に写し取っています。さらに蘭がいかに成長し、美しい糸になって育っていくか、その過程での造形的な美しさと色彩美の両面を表現しながら、一つの物語に作り上げたところが素晴らしい作品でした。



「陝西省 韓城市 2000年4月(黄土高原の村)」

第 16 回
「黄土高原の村／満蒙開拓の村」(写真集) 後 藤 俊 夫 (ごとう・としお)

1938年(昭和13)茨城県生まれ。茨城大学文学部文学科卒業後、茨城県立高校教員(英語)として勤務、写真部顧問をつとめる。1982年(昭和57)水戸市美術展に初入選。2001年(平成13)中国で独自の取材旅行を始め、2003年(平成15)から翌年にかけて写真展「黄土高原の村」開催、2006年(平成18)写真集「黄土高原の村／満蒙開拓の村」刊行。その後戦後の国内の開拓事業に目を向け、取材活動を続ける。日本写真協会会員、茨城県美術展写真部会員、水戸市美術家連盟会員。茨城県水戸市在住。

大版で映像効果をねらうような意図などとはほど遠く、こじんまりしたつくりの写真集ですが、一見、一読、さらに何度が頁を繰るごとに、悠久の大地の中に吸い込まれて、いのちの根源にふれるような感動を覚えます。風土への渴仰と共生に運命を託した農民への共感が伝わってくるのです。



「蘭盆勝会2 長崎市鍛冶屋町、崇福寺
1977年9月」

第 17 回
「長崎フォトランダムー長崎ば撮ってさらき、半世紀ー」(写真集) 小 林 勝 (こばやし・まさる)

1926年(大正15)長崎県生まれ。旧制長崎県立長崎中学校卒業。海軍電測学校に進み、長崎外国語学校を経て親和銀行就職。1960年(昭和35)国際写真サロン初入選以後、国画会、二科展、視点展等で入選入賞を重ねる。1961年(昭和36)長崎県展文部大臣賞受賞。1994年(平成6)長崎市教育委員会文化功労表彰。2007年(平成19)長崎大学付属図書館に約4万枚のフィルム原板、プリント写真等を寄贈。2008年(平成20)長崎県民表彰特別賞。林忠彦賞受賞を契機に周防、瀬戸内の歴史に惹かれ周南市周辺の取材旅行を続ける。長崎県長崎市在住。

この方は81歳とは思えない非常に新鮮な目で長崎を見ておられる。現代の長崎とかつての長崎、その時間の併置、これは単に風景を撮るだけといった類のものでは決してなくて、時代の変遷、時代の変化を撮るという明確な意識が感じられる。長崎のとくに被爆の風景を知っている人にとっては複雑な思いがあるでしょう。その辺の心の動きみたいなものがこの写真の中に出ていていると思います。



「壊れた脳とともに生きる—山田規敏さんの暮らし」

第 18 回

「ロマンティック・リハビリテーション〜夢みる力20の物語〜」(写真集・写真展)
大西 成 明 (おおにし・なるあき)

1952年(昭和27)奈良県生まれ。早稲田大学第一文学部社会学科卒業。1992年(平成4)写真集『象の耳』で日本写真協会新人賞受賞。1999〜2000年(平成11〜12)写真週刊誌で連載した「病院の時代—パラッド・オブ・ホスピタル」で1999年週刊現代ドキュメント写真大賞、2000年講談社出版文化賞受賞。他に『日本の川100』『ひよめき』『ザ・モンキー』(共著)『ホネホネたんけんたい』(共著)『人形記』(共著)など。東京造形大学教授。日本写真家協会会員。東京都柏江市在住。

大西さんは、非常にシリアスな問題を、深い人間の理解といったものをベースに誠実に淡々と撮っておられます。決してセンチメンタルに涙を誘うのではない、その辺のギリギリのところを見事に捉えており、大変優れた写真家だと思います。こういう作品が今日の大きな時代の記録として残り、生きていくのだらうと思うのです。大いに賞賛したいと思います。

第 19 回

「トオヌッブ」(写真集・写真展・雑誌掲載) 小栗 昌 子 (おぐり・まさこ)

1972年(昭和47)愛知県生まれ。名古屋ビジュアルアーツ卒業。1995年(平成7)写真展「川のほとりで」開催。1999年(平成11)岩手県遠野市の土地と人に魅せられ移住。2005年(平成17)「百年のひまわり」で第3回ビジュアルフォトアワード奨励部門大賞受賞。2006年(平成18)日本写真協会新人賞受賞。2008〜09年(平成20〜21)写真展「トオヌッブ」開催。2009年(平成21)写真集「トオヌッブ」発行。2010年(平成22)『日本カメラ』1〜12月号に「フサパノバの山」連載。岩手県遠野市在住。

遠野に住んでいる方々の様々な側面を捉えています。作者が10年住み、その中でコツコツと撮っていったというだけあって、その周辺の方々との間に非常にほつきりとした、しっかりとした人間関係が生まれています。日本の奥深いところにある、日本そのものというものを捕まえようとする意識が、この作品の根底にあるのではないかと思います。

第 20 回

「基隆」(写真集・写真展・雑誌掲載) 山内 道 雄 (やまうち・みちお)

1950年(昭和25)愛知県生まれ。1975年(昭和50)早稲田大学第二文学部卒業。1982年(昭和57)東京写真専門学校(現東京ビジュアルアーツ)卒業。森山大道に師事。自主ギャラリー・イメージショップCAMPに参加し写真発表を始める。ストリートスナップの撮り手として活動を続け、東京をはじめ世界各地で街の中の人にカメラを向けシャッターを切り続ける。写真展開催、写真集出版多数。1997年(平成9)写真展「英領 HONG KONG」で第22回伊奈信男賞受賞。2016年(平成28)写真集「DHAKA2」で第35回土門拳賞受賞。東京都杉並区在住。

台湾の「基隆」という街の状況を描写している写真が続き、街の状況を一望できます。斜めの画面や粒子を荒すなどの表現からは、活気のあるざわめき、喧噪がそのまま伝わってきます。自分の想い出と経験、体験といったものを迫力あるスナップで撮影、素直に表現したドキュメンタリー写真で、見る者を釘付けにします。

<http://michiomyamauchi.under.jp/>



「田植えの後で」



「2011年1月31日 墨田区 八広」

第 21 回

「東京 | 天空樹 Risen in the East」(写真集)
佐藤 信 太 郎 (さとう・しんたろう)

1969年(昭和44)東京都葛飾区生まれ。1992年(平成4)東京総合写真専門学校、1995年(平成7)早稲田大学第一文学部卒業。共同通信社入社。2001年(平成13)同社退社、翌年フリーランスとなる。一貫して都市をテーマに写真を撮り続ける。写真集に「夜光」「非常階段東京—TOKYO TWILIGHT ZONE—」など。他に写真展多数開催。2009年(平成21)「TOKYO TWILIGHT ZONE—非常階段東京—」で日本写真協会賞新人賞受賞。2013年(平成25)林忠彦賞受賞により千葉市第30回教育・文化・スポーツ等功労者表彰受賞。千葉県千葉市在住。

スカイツリーを中心にした極めて都会的な風景写真集といえるでしょう。戦後の古い建物の先にはスカイツリーの上部が見えたりする。味わいのある写真集になっています。スカイツリーの建設をひとつの材料にしながら風景と時間の経過を見ており、東京の極めて重要なドキュメントが全てこの中にあるといえます。

<http://sato-shintaro.com/>
<https://www.facebook.com/shintaro.sato.35>
<https://twitter.com/satoshintaro>



(左)「つぶろさし 佐渡・新潟県」
(右)「道ゆき 高千穂・宮崎県」

第 22 回

「遠くから来た舟」(写真展) 小 林 紀 晴 (こばやし・きせい)

1968年(昭和43)長野県茅野市生まれ。1988年(昭和63)東京工芸大学短期大学部写真科卒業。1991年(平成3)に新聞社カメラマンを経て独立。2000年〜2002年(平成12〜14)ニューヨーク滞在。写真家としてだけでなく、小説執筆など幅広く活動。写真集に「Homeland」、「days new york」、「SUWA」「はなはねに」「kemonomichi」など。著書に「ASIA ROAD」、「写真学生」、「父の感触」、「十七歳」ハッピーバースデー 3.11(共著)、「メモワール 写真家 古屋誠一との二十年」など多数。1997年(平成9)「DAYS ASIA」で日本写真協会新人賞受賞。東京工芸大学教授。東京都在住。

日本というものが地球の中でどういう所に在るのか、その神々というものが私たちの生きる今日にも存在していることが伝わってきます。あちこちの神事やそれにまつわるものが、自分の村や町にも「これはあるね」と感じられます。写真の表現や構成にも工夫があり、白黒やカラー、カラーの中でもハイキーに仕上げた写真、アンダーに仕上げた写真などが混じっていて効果的です。

<http://www.kobayashikisei.com/>

第 23 回

「Remembrance」(写真冊子) 笹 岡 啓 子 (ささおか・けいこ)

1978年(昭和53)広島市生まれ。東京造形大学卒業。2001年(平成13)写真家北島敬三らと、写真家自身による自主運営ギャラリー「photographers' gallery」を設立参加。「Difference 3.11」を機に2012年(平成24)から2013年(平成25)にかけて写真冊子「Remembrance」を刊行。2008年(平成20)「VOCA展2008」奨励賞受賞。2010年(平成22)日本写真協会新人賞受賞。2012年第12回さがみはら写真新人奨励賞受賞。

「Remembrance」とは記憶ということでしょうか。被災地の瓦礫の写真があります。この瓦礫の写真とそれが取り去られた後の静止した写真、そうしたものがよく表現され、時間的経過の記録がよくわかります。単にドキュメント写真、記録写真というものを超えて、記録の中、風景の中に人間の営みの凄さが感じられます。そういう意味で、時代の記録であり、自然の記録であり、自然の恐ろしさの記録であり、それに立ち向かう人間の力の記録であり、といった様々なことを感じさせてくれます。

<http://pg-web.net/>
<https://www.facebook.com/ssokkik>



「福島県双葉郡浪江町舘戸 2013年8月2日」



「NEW YORK」

第 24 回

「STREET RAMBLER」(写真集) 中 藤 毅 彦 (なかふじ・たけひこ)

1970年(昭和45)東京都生まれ。早稲田大学第一文学部中退後、東京ビジュアルアーツ写真学科入学、森山大道に学ぶ。在学中より、モノクロームの都市スナップショットを中心に撮影を続け作品を発表している。国内の他、東欧、キューバ、ロシア、アメリカなど世界各地を取材。作家活動とともに、新宿四谷三丁目にギャラリー・ニエブスを運営。2013年(平成25)第29回東川賞特別作家賞受賞。

この作品は、ニューヨークやパリ、上海、東京などを撮影しています。ニューヨークといえば1950年代のウィリアム・クラインの「ニューヨーク」という写真集は、フィルムの子をわざと荒らした感じで喧騒を表現し、日本の写真家たちも影響を受けました。中藤さんの粒子を荒らしたような写真が出てきたりと懐かしさが込み上げてきます。白と黒のコントラストがありながら粒子が粗いというのは、平和な時代というより荒々しい時代を表現する効果があり、ニューヨークや東京のような大都会は、そういう写真を作ることはまだまだ有効だと思います。

<http://takehikonakafuji.com/>

<https://www.facebook.com/takehikonakafuji>

<https://twitter.com/nakafujitake>



第 25 回

「フィリピン残留日本人」(写真集) 船 尾 修 (ふなお・おさむ)

1960年(昭和35)神戸市生まれ。筑波大学生物学類卒業。在学中より探検部に所属し、登山の基礎を学び、登山をきっかけに訪れたアフリカ放浪旅行の経験から写真家への道を志す。30代半ばでフリーの写真家・ライターとなり、雑誌等に海外ルポなどを発表。写真集「カミサマホトケサマ」で2009年(平成21)第9回さがみはら写真新人奨励賞受賞。2016年(平成28)第16回さがみはら写真賞受賞。

戦前フィリピンに移住した日本人が結婚し、そこで生まれた子どもたちは戦後、父親が日本人であるということをはっきりと表に出せない過酷な状況が続きました。船尾さんは7年間フィリピンで取材をされ、モノクロームの確かな写真表現により、戦後70年に相応しい第一級のドキュメンタリー作品を制作されました。

<https://www.funaoosamu.com/>

<https://www.facebook.com/osamu.funao.photography/>

<https://twitter.com/funaoosamu>



第 26 回

「TOKYO CIRCULATION」(写真集・写真展) 有 元 伸 也 (ありもと・しんや)

1971年(昭和46)大阪府八尾市生まれ。1994年(平成6)ビジュアルアーツ専門学校大阪卒業。インド、チベットに撮影に行き、以後数回にわたり撮影のため同地に赴く。1998年(平成10)「西藏より肖像」で第35回太陽賞受賞。東京に居を移し、東京の都市の人々を撮影する。2000年(平成12)から東京ビジュアルアーツ専門学校で講師を務めながら、自身が運営するギャラリーで数多くの個展を開催。2017年(平成29)日本写真協会賞作家賞受賞。

大都会・東京の路上で会った人々たちを10年以上こつこつと撮影したのですが、モノクロームにしたことによって様々な色彩が消されて行き会った人や光景が際立ちます。作者が、被写体となる人たちとコミュニケーションをとりながら撮影した作品の数々は、重厚感あふれる中にも、大変人間的であり、作品の持つ圧倒的なエネルギーは選考委員会でも高く評価されました。

<https://arimotoshinya.com/>

<https://www.facebook.com/TOTEM-POLE-PHOTO-Gallery-143755425772882/>

https://twitter.com/tppg_news

周南市美術博物館

周南市美術博物館は1995年(平成7)に開館しました。美術、歴史のほかに写真の常設展示室「林忠彦記念室」があり、周南市出身の写真家林忠彦の作品や資料を展示しています。また常設展だけでなく企画展においても大規模な写真展を開催し、写真芸術を広く紹介しています。



〈林忠彦記念室〉

写真家林忠彦の芸術と生涯を紹介する常設展示室で、9つのコーナーがあります。



1. 譜

林忠彦の生涯を年譜で紹介

2. 想

秋山庄太郎、植田正治など交流のあった写真家のことばを紹介

3. 撮

「いま」を撮る、「ひと」を撮る、「とき」を撮ると題し、林忠彦の作風の変遷を、当時の雑誌『婦人公論』『小説新潮』などに掲載された作品で紹介



4. 継

アマチュア写真家の育成に力を注いだ林忠彦を記念して、平成3年に創設された「林忠彦賞」を紹介

5. 東海道

晩年の大作「東海道」を紹介
代表作2点と、撮影時に使用したカメラ、三脚、車椅子等を展示



7. ルパン

林忠彦が太宰治らを撮影した銀座のバー「ルパン」のカウンターを再現、雰囲気伝える。「太宰治」「織田作之助」「坂口安吾」を展示

8. 映像コーナー

林忠彦の晩年の姿を「大いなる遺産—林忠彦の世界—」で放映

9. 作品展示

オリジナルプリント等を展示
随時展示替を行う



6. 林忠彦資料

林忠彦が遺したさまざまな資料を、随時紹介

周南市文化会館



周南市文化振興財団は、昭和57年(1982)周南市文化の推進に寄与することを目的として設立、平成25年(2013)公益財団法人に移行しました。現在周南市から委託を受け、周南市文化会館、周南市美術博物館、周南市郷土美術資料館3館の管理運営を行っています。

周南市郷土美術資料館



これまでに公益財団法人周南市文化振興財団が開催した写真展を紹介します。(抜粋)
末尾が無印は周南市美術博物館、●は周南市文化会館、★は周南市郷土美術資料館で開催した展覧会です。

昭和58年度(1983)

- ◆林忠彦写真展「日本の家元」●
- ◆「林忠彦とイタリアの旅」写真展 ●

昭和59年度(1984)

- ◆林忠彦写真教室作品展 ●

昭和63年度(1988)

- ◆昭和史の回顧展「林忠彦50年写真総集展」●

平成3年度(1991)

- ◆林忠彦追悼展「東海道を撮る」●
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」●
- ◆第1回林忠彦賞「西域—シルクロード」後藤正治 ●

平成4年度(1992)

- ◆秋山庄太郎写真展「昭和の美女」●
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の画家108人」●
- ◆第2回林忠彦賞「田園の微笑」捧 武 ●

平成5年度(1993)

- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の作家109人」●
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「カストリ時代」●
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「長崎 海と十字架」●
- ◆第3回林忠彦賞「静岡の民家」木村伸久・「たかちほ」田崎 力 ●

平成6年度(1994)

- ◆林忠彦オリジナルプリント展「小説のふるさと」●
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「西郷隆盛」●
- ◆第4回林忠彦賞「帰らなかった日本兵」長 洋弘●

平成7年度(1995) ※9月4日周南市美術博物館開館

- ◆残された楽園 ネイチャーフォトグラフィー展
- ◆第5回林忠彦賞「追いつめられたブナ原生林の輝き」岡田 満
- ◆常設展 林忠彦コレクション「日本の家元」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦時下の日本」「カストリ時代」「日本の作家」「小説のふるさと」「日本の画家」「長崎 海と十字架」「若き修羅たちの里—長州路」「西郷隆盛」より

平成8年度(1996)

- ◆林忠彦×カール・マイダンス展 焼け跡からの半世紀—日米フォトジャーナリストの観た日本
- ◆第6回林忠彦賞「サバノナが輝く瞬間」井上冬彦
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦時下の日本」「カストリ時代」「日本の作家」「小説のふるさと」「日本の画家」「長崎 海と十字架」「若き修羅たちの里—長州路」「西郷隆盛」「織田廣喜」「日本の家元」「茶室」より



「林忠彦50年写真総集展」開会式での林忠彦



「若き修羅たちの里—長州路」チラシ



「カストリ時代」チラシ



林忠彦×カール・マイダンス展

平成9年度(1997)

- ◆美しい記憶 秋山庄太郎展
- ◆第7回林忠彦賞「ぼくは、父さんのようになりたい」井上 暖
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「日本の作家」「若き修羅たちの里—長州路」「東海道」「カストリ時代」「日本の画家」より



秋山庄太郎展

平成10年度(1998)

- ◆立木義浩展「親子の肖像」
- 同時開催「立木義浩の世界 光の人、舌出し天使、エチュード、EVES」
- ◆第8回林忠彦賞「天空の民」清水公代
- 選考委員会特別賞「戦後の山村—学校医のまなざし—」近藤祐一
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「織田廣喜」「カストリ時代」「日本の画家」より



立木義浩展

平成11年度(1999)

- ◆緑川洋一展「山陽道」～歴史薫る陸の道と海の道～
- ◆第9回林忠彦賞「Personal View〔視線の範囲〕」渡里彰造
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「東海道」

平成12年度(2000)

- ◆星野道夫の世界展 21世紀へのメッセージ—Alaska風のような物語
- ◆第10回林忠彦賞「塩の道 秋葉街道」竹林喜由
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「アメリカ1955」



星野道夫の世界展

平成13年度(2001)

- ◆細江英公の写真1950—2000
- ◆第11回林忠彦賞「ニューヨーク地下鉄ストーリー」角田和夫
- ◆林忠彦賞歴代受賞作品展
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「文士の時代」「日本の作家」より



細江英公の写真

平成14年度(2002)

- ◆オードリー・ヘップバーン ポプ・ウィロビー写真展
- ◆第12回林忠彦賞「静かな時への誘惑」石川博雄
- ◆秋山庄太郎追悼展「平成 昭和の美女／男の貌」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「文士の時代」「日本の作家」より

平成15年度(2003)

- ◆川端康成 文豪が愛した美の世界(川端康成撮影の写真作品)
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の家元」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「若き修羅たちの里—長州路」「カストリ時代」「日本の画家」「日本の作家」「文士の時代」「小説のふるさと」より



川端康成 文豪が愛した美の世界より
川端康成撮影の写真作品

平成16年度(2004)

- ◆第13回林忠彦賞「海を見ていた一房総の海岸物語」飯田 樹
- ◆ハーブ・リッツ写真展
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「日本の画家」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「カストリ時代」「日本の画家」「日本の作家」「文士の時代」「小説のふるさと」より

平成17年度(2005)

- ◆第14回林忠彦賞「古志の里Ⅱ」中條均紀
- ◆現代美術のABC ～アートはあなたのそばにある～
(佐藤時啓+Wandering Camera、澤田知子、野村仁、やなぎみわ、デイヴィッド・ホックニー写真作品)
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「長崎 海と十字架」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「カストリ時代」「文士の時代」「日本の作家」「小説のふるさと」より

平成18年度(2006)

- ◆第15回林忠彦賞「繭の輝き」田中弘子
- ◆世界遺産写真展Ⅲ
- ◆第21回国民文化祭・やまぐち2006 美術展[写真]
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「織田廣喜」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「カストリ時代」「文士の時代」「日本の作家」「小説のふるさと」「異郷好日 世界の旅」より
- ◆常設展 林忠彦記念室「第1回～15回林忠彦賞受賞作品展」

平成19年度(2007)

- ◆第16回林忠彦賞「黄土高原の村／満蒙開拓の村」後藤俊夫
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「東海道」
- ◆常設展 林忠彦記念室「第1回～15回林忠彦賞受賞作品展」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「東海道」

平成20年度(2008)

- ◆第17回林忠彦賞
「長崎フォトランドムー長崎ば撮ってさき、半世紀」小林 勝
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「長崎 海と十字架」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「東海道」
- ◆常設展 林忠彦記念室「第1回～16回林忠彦賞受賞作品展」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦、秋山庄太郎
「秋山庄太郎VS林忠彦 美女・文士」



林忠彦記念室「秋山庄太郎VS林忠彦 美女・文士」



ハーブ・リッツ写真展



世界遺産写真展Ⅲ



第21回国民文化祭やまぐち2006
美術展[写真]

平成21年度(2009)

- ◆第18回林忠彦賞
「ロマンティック・リハビリテーション～夢みる力・20の物語～」大西成明
- ◆常設展 生誕90年記念「林忠彦の世界」
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」
- ◆常設展 林忠彦記念室「第1回～17回林忠彦賞受賞作品展」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「日本の家元」「若き修羅たちの里—長州路」「異郷好日 世界の旅」「東海道」「カストリ時代」「日本の作家」より
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「日本の画家」



生誕90年記念「林忠彦の世界」

平成22年度(2010)

- ◆第19回林忠彦賞「トオヌツプ」小栗昌子
- ◆岩合光昭写真展—かけがえのない地球 いのちの輝き—
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「カストリ時代」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「林忠彦と昭和の作家たち」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「若き修羅たちの里—長州路」
- ◆林忠彦写真展「東海道を撮る」★



岩合光昭写真展

平成23年度(2011)

- ◆第20回林忠彦賞「基隆」山内道雄
- ◆林忠彦賞20回記念写真展
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「異郷好日 世界の旅」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「林忠彦の世界Ⅰ」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「林忠彦の世界Ⅱ」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「西郷隆盛」
- ◆林忠彦写真展「東海道を撮るⅡ」★



林忠彦賞20回記念写真展

平成24年度(2012)

- ◆第21回林忠彦賞「東京 | 天空樹 Risen in the East」佐藤信太郎
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「小説のふるさと第1期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「小説のふるさと第2期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「小説のふるさと第3期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「アメリカ1955(1)(ハワイ、ロスアンゼルス)」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「アメリカ1955(2)(ニューヨーク、フロリダ)」
- ◆林忠彦写真展「世界と日本のこころ旅 世界編」★



周南市郷土美術資料館
林忠彦写真展「東海道を撮るⅡ」

川崎市市民ミュージアム(2012)

- ◆林忠彦賞20回記念写真展
林忠彦賞が20回を迎えたことを
記念し、2011年の周南市美術
博物館に続き、開催しました。



平成25年度(2013)

- ◆第22回林忠彦賞「遠くから来た舟」小林紀晴
- ◆周南市誕生10周年記念 岩合光昭写真展「ねこ」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「茶室」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「写真集発刊30周年記念 日本の家元」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「男の美学」
- ◆林忠彦写真展「日本の画家」★

平成26年度(2014)

- ◆第23回林忠彦賞「Remembrance」笹岡啓子
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「WOMAN 昭和の女性たち」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「東海道Ⅰ」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「東海道Ⅱ」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「西郷隆盛」
- ◆林忠彦写真展「日本の画家」★

平成27年度(2015)

- ◆第24回林忠彦賞「STREET RAMBLER」中藤毅彦
- ◆第17回林忠彦賞受賞者 小川勝写真展「周防長門残照」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「アメリカ1955(NEW YORK)」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦後70年 戦時下の日本」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦後70年 カストリ時代Ⅰ期 復員、終戦の後」
- ◆常設展 林忠彦記念室 大竹省二「大竹省二氏追悼展示」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦後70年 カストリ時代Ⅱ期 動きだした日本」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「戦後70年 カストリ時代Ⅲ期 テレビ時代来る」

平成28年度(2016)

- ◆第25回林忠彦賞「フィリピン残留日本人」船尾 修
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「天恩山五百羅漢寺」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「日本の画家Ⅰ」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「日本の画家Ⅱ」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「異郷好日 世界の旅Ⅰ」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「異郷好日 世界の旅Ⅱ」
- ◆林忠彦写真展「東海道を撮る」★



岩合光昭写真展「ねこ」



林忠彦記念室「戦後70年 戦時下の日本」



林忠彦記念室「日本の画家」

平成29年度(2017)

- ◆第26回林忠彦賞「TOKYO CIRCULATION」有元 伸也
- ◆林忠彦オリジナルプリント展「若き修羅たちの里—長州路」「西郷隆盛」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「茶室Ⅰ期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「茶室Ⅱ期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「茶室Ⅲ期」
- ◆常設展 林忠彦記念室 林忠彦「茶室Ⅳ期」
- ◆林忠彦写真展「東海道を撮る」★



林忠彦記念室「茶室Ⅱ期」

ブロンズ像 (裏表紙写真)

林忠彦賞受賞者に授与されるブロンズ像は、周南市出身の彫刻家、笹戸千津子氏によって制作されました。

笹戸千津子

1948年(昭和23)山口県周南市に生まれる。東京造形大学美術学科彫刻専攻に一期生として入学、佐藤忠良に師事する。卒業後同大学彫刻研究室にはいり、1971年(昭和46)第35回新制作展に「き子」「腰かけるき子」を初出品、以後毎年出品を続ける。1973年(昭和48)研究室を修了し佐藤忠良のアトリエで制作を始める。1977年(昭和52)新制作協会会員。全国各地で個展や合同展を開催する。1987年(昭和62)第18回中原悦二郎賞優秀賞、1993年(平成5)第7回神戸具象彫刻大賞展準大賞受賞。女性像を多く制作し、全国のパブリックスペースに作品が設置されている。



ブロンズ像
笹戸千津子作「爽」

写真展

□東京展 富士フィルムフォトサロン

4月20日(金)→4月26日(木) 会期中無休

10:00~19:00(最終日16:00まで)

東京都港区赤坂9-7-3 東京ミッドタウン フジフィルム スクエア TEL(03)6271-3351

<http://fujifilmsquare.jp/>

□周南展 — 林忠彦の生誕地にある — 周南市美術館

5月11日(金)→5月20日(日) 月曜日休館

9:30~17:00(入館は16:30まで)

山口県周南市花島町10-16 TEL(0834)22-8880

<http://s-bunka.jp/bihaku/>

□東川展 写真の町 東川町文化ギャラリー

11月28日(水)→12月12日(水) 会期中無休

10:00~17:30(最終日15:00まで)

北海道十勝郡東川町東町1-19-8 TEL(0166)82-4700

<http://photo-town.jp/>

編集・発行／林忠彦賞事務局(公益財団法人周南市文化振興財団)

周南市美術館 〒745-0006 山口県周南市花島町10-16

TEL(0834)22-8880 FAX(0834)22-8886

<http://hayashi-award.com/>



発行日／平成30年3月31日 印刷／大村印刷株式会社